子どもが成長する一日

津守　真

一、

保育室から庭に出たところに、私はひとりの子どもの手をひいて立っていたとき、ふと気がつくと、後からA夫が私の手にさわっていた。

母親の膝からおりて、奥の部屋から保育室を横切って、庭の出口までひとりで出てきたのだった。その日、A夫は、ひとりで部屋の中を歩きまわり、隅の槽の上に登り、その後を歩くなど、いつもだと母親と私の手をひいてしか行かない場所を、ひとりで手を振って歩いた。

A夫が私の手にさわっていたとき、私がそれに気が付いて驚いたのは、A夫のその行為の中に、この子どもの心の思いがこめられているのを見たからであった。自分で独力で歩

きたいという日頃の思いは、この日のいろいろの条件に支えられて、この意志的な行為となった。

庭に出てゆく私のあとを追って、母親の膝からおりて部屋を横切って歩いてきたとき、A夫はこれをひとりで敢えてしたのだった。私はその気持を受けとめた。思い切ってそうした子どもの気持に気付けば、それを受けとめるのはあたりまえであろうが、しばしば子どもたちの中での忙しさに追われて、傍に寄ってきた子どもの思いに気付かないことがあるに違いないことを、私はこの日にあらためて考えさせられた。

A夫は、このあと、ひとりであちこちを歩きまわった。これは能動性をもって歩くという、長い間にわたってA夫自身が問いつづけてきたテーマである。この日、A夫が私のあとを追って思い切って歩くというひとつの行為の時がおとずれたとき、それがきっかけとなって、このテーマは展開した。

子どもは、刺激—反応の鎖のひとつではなく、自らの内なる課題をになって行為する存在である。保育者も、反応を期待して刺激を与えるひとつの点ではなく、他者と自分の存在の本質に接して現実に生きる存在である。子どもの内なる課題に気付き、それにこたえて行為するとき、大人と子どもとの関係は創造的に変容しはじめる。私が床にひっくり返って、助けて—というとA夫は私の手をひき、そうしている間に、ひとりで彼方に自由に歩いてゆく。私にもA夫にも、一瞬先の未来は冒険と試みであるけれども、存在の本質にふれつつ、前途は着実に開かれてゆく。保育の一日の歩みはこうして進められる。

二、

朝、M夫が門から入ってきたとき、庭の途中で母親にまつわり、何かだだをこねている様子だった。私はそれに気付いていたのだが、傍で私を頼りにしている子どもから離れられず、M夫とつき合いの深いF先生を見つけたので、そのことを告げた。

その次に私がM夫と出合ったのは、しばらく後に彼が三輪車に乗って、F先生と声を上げて庭を走っているところだった。その日、保育が終ってから、どのようにしてM夫は元気になったのかをたずねた。

入ろうか、出ようかといつも迷いの中にあり、デリケートで、いまにもこわれそうなM夫とつき合ってF先生は一日を過したという。元気にしていると見えたのは、見えないところで保育者に支えられている子どもの一側面である。その子の本質をあらわにしているような遊びも、そのような保育者との関係の中に生れる。午後になって、ホールのトランポリンで、リズミカルにとんでは小刻みに足踏みをし、自分で倒れるのをくり返しているM夫を見て、私はその動きに合わせてリズムを口ずさんだ。M夫はまたそれに合わせて何度も自分で転んでは起き上る遊びをくり返した。他の子どもに倒されるのは我慢がならず、そのくらいならば、自分から先に転んでしまう。倒されても自分から起き上るというこの子どものテーマである。そのテーマをM夫はたのしんでためしている。

弁当のとき、音楽が響くと、耳に手をあて食べるのをやめてしまう。ようやく、トメテ

クダサイ、と小さな声で云う。おそれながら、しかし思い切って、M夫は表現する。帰るころには、トランポリンに他の子どもがのってきても、おそれずに、自分からその動きに合わせ、二人でとんでいた。

迷いの中にある子どもをうけとめられるのは、子どもの内なるテーマを承知して、その微妙な心の動きに沿って応答することのできる保育者である。それはただひとりの人に限られるのではないが、そのような人と一日を過すときに、子どもは安心して揺れ動き、成長への一歩を踏み出すことが可能になるのだろう。

M夫は、夏休みには、ああでもない、こうでもないとだだをこねることが多かったという。だだをこねるというのは、出ようか入ろうかとの心の動揺があることだろう。ねまきに着がえるのがいやで、赤ちゃんのときの小さなパジャマを着ると云い、一度着ると、こんどは脱がないとがんばるのだという。成長の前進をしようか、するまいかと揺れ動く心がここにもある。

後退と前進をくり返しながら、ほんの少しずつ、子どもは前進する。子どもの心の内なるテーマを理解する保育者との関係の中で、子どもは成長する。

三、

保育者は、子どもの行為に驚ろかされたり、困惑させられたりする。そこで気付かされる子どもの行為は、「ひとりで歩いてきて」とか、「母親にまつわり、だだをこね」とか記

述することができる。更に、子どもはどのように感じてそれをしているのかを、大人は見てとることが出来るし、それを記述することも可能である。子どもは「敢えて」、「思い切って」「意志をもって」誇らしくそれをしたのであり、また「迷いつつ」「おそれながら、しかし思い切って」それをしたのである。

ひとつの行為には、それをする子どもに共通の意味と、その特定の子どもの、その場面の独自の意味との両方がある。両者を考えて、その子どもの行為の本質に近づき、大人が応答するとき、子どもは自分自身の内なる課題と、取り組むことができる。その大人との間で、子どもは安心してひとりで歩きまわることを試み、また、自分で転んでは起き上る遊びをくり返す。

こうして、保育の場は、子どもが成長する一日となる。

(注) ここに記したA夫とM夫は、津守　真「子どもの世界をどう見るか」NHKブックスのP134とP137に記されている。そのつづきである。

（愛育養護学校）